

# 日本漢語における通仮現象に関する考察 明治三〇年代の作品を中心に

宋 春 玲

## 要 旨

中国古代汉语通假字の現象、广泛地出现在日语当中、但是在日语的使用中发生了很多变化。笔者以明治三十年代的文学作品以及读卖新闻为中心进行了调查。调查结果表明、日本の漢語当中存在通假字、与中文通假字不同的是、日语通假现象以词的形式出现情况居多。

キーワード……通仮字 通仮現象 日本製漢語

## はじめに

通仮字は古代中国語によく現れる文字の仮借現象であり、日本の漢語にも存在している。通仮字は研究対象として、国語学では取り上げられていない。しかし、日本の漢語にも通仮字現象が存在していることが文献調査によって、あきらかになった。本研究は平安末期から明治時代までの辞書調査を踏まえたうえで、明治三〇年代の作品を中心に、調査を行い、日本語に存在する通仮字

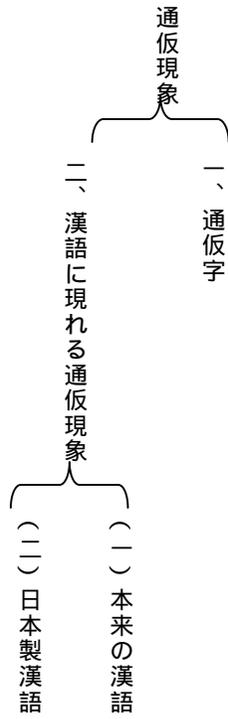
的な現象を通覧し、特に漢語熟語によく現れる通仮現象について、研究するものである。明治三〇年代は、この類の漢語が変化の激しい時期であることは、筆者がすでに行った調査から予想されることである<sup>1)</sup>。

調査については、明治期において、実際に使われる文献を調べることが本研究の方針である。ここでは、国会国立図書館のホームページの近代デジタルライブラリーにより発行当時の文学作品をダウンロードし、調査すると同時に、明治二九年から明治四〇年までの電子版『読売新聞』を調査し、この類の漢語の変遷する傾向をまとめた。

日本における漢字音表記は主に三卷本前田本と黒川本の『色葉字類抄』により示す。中国語原音の復元は(藤堂明保・小林博共著 昭和四六年)『韻鏡校本』に従い、場合によって、董同龢『上古音韻表稿』(一九七五年)の復元を引用することがある。このほかに、研究対象が各時代における現れ方を検証するため、各時代の代表的な国語辞書を使うことにした。それが、鎌倉末期から江戸時代にかけての『古本節用集』<sup>(2)</sup>、江戸時代の『落葉集』<sup>(3)</sup>、『書言字考節用集』<sup>(4)</sup>、明治期の『新令字解』<sup>(5)</sup>、『漢語字類』<sup>(6)</sup>、『必携熟字集』<sup>(7)</sup>、『新編漢語字林』<sup>(8)</sup>、『言海』<sup>(9)</sup>などである。本研究では、漢字音を考える場合、中国語を対照することがある。反切は『廣韻』<sup>(10)</sup>により示し、現代中国語の発音は『漢語大詞典』<sup>(11)</sup>の拼音表現によって示す。

一、日本語における通仮現象の分類

日本語の通仮現象は以下のように分類できると考えられる。次  
にあげる用例は現代日本語五十音順で並べる。



- 通仮字  
 本来の漢語  
 慧・恵 蹟・跡・迹 智・知 辨・辯  
 記憶・記憶 回復・恢復 看破・觀破 伎倆・  
 伎倆 結構・結構 原因・原因 検査・検査  
 構造・構造 交代・交替 刺激・刺戟 失策・  
 失錯 熟練・熟練 親切・深切 震動・振動 粗  
 忽・疎忽 丹精・丹誠 丁寧・丁寧 叮嚀 顛  
 倒・転倒 顛覆・轉覆 反復・反覆 冥土・冥  
 途 模型・模型 摸索・摸索 模様・模様 容  
 態・容體 豫期・預期 老練・老練 連接・聯  
 接 連結・聯結
- 日本製漢語  
 愛嬌・愛敬 愛想・愛相 一緒・一所 憶説・  
 臆説 癩癩・肝癩 肝腎・肝心 強情・剛情 辛  
 抱・辛棒 難儀・難義 不思議・不思議

- 不思議 返事・返辞 未練・未練 無残・無惨・  
 無慚・無慚 用捨・容赦 理屈・理屈 流儀・  
 流儀 了見・了簡・料見・料簡

二、通仮字

古代中国語には通仮字現象が広く使われており、同音通仮字と  
呼ばれている。同音通仮については王力（一九八一年）<sup>12)</sup>『古代  
漢語』（五四一～五四五頁）では、以下のように述べている。

所謂古音通假。就是古代汉语书面语言里同音或音近的字的通  
用和假借。

（中略）

例如早晨的 zǎo 这个字本应该写成“早”，但是《孟子·离婁下》  
蚤起，施从良人之所之，却写成蚤，蚤的本义是跳蚤，早晨的早  
所以写成蚤，只是因为二者声音相同，在记录语言里，zǎo（早，  
早晨）这个词的时候，早蚤二字通用。

（中略）

（五四五頁）

假借字的形成，根据这样一个原则：语音必须相同或相近。（略）  
就上面所举的例子来说，早、蚤，唯、惟，惠、慧，由、猶，  
曾、增，辨、辯，具、俱，舟、周既然完全同音，自然没有什  
么可以讨论的。有时候假借字与本字虽然也可以只是双声或者  
是叠韵，但是韵部如果相差很远，即使是双声也不能假借，如

果韵母相差很远，即使是叠韵也不能假借。

（同音通仮は古代漢語書き言葉には、同音、或いは音が近い字を通用し、仮借現象である。（中略）例えば、「朝」を意味する zāo は「早」で記入すべきであるが、『孟子』離婁下には「蚤起、施從良人之所之」というふうには「蚤」で記入している。「蚤」の本意は「ノミ」で、朝を意味する「早」を、「蚤」で記入する理由はただ二者の音が同じだけである。このとき、「蚤」は「早」の通仮字だと呼ばれる。音が同じであるため、言語を記録する場合、「早」と「蚤」は一緒である。

（中略）

通仮字の形成における一つの原則として、通仮字となる二字は音が必ず同じ、あるいは近いということである。例を挙げてみると、早と蚤、唯と惟と維、恵と慧、由と猶、曾と増、辨と辯、具と俱、舟と周などである。音が同じであるからこそ、これ以上論じる必要がない。場合によって、仮借字と本字には双声か疊韻の関係がある。もし、韻部があまりにも違えば、たとえ、双声でも仮借することができない。もし、声母があまりにも違えば、たとえ、疊韻でも仮借することができない。

佐藤稔「異体字」<sup>13</sup>には通仮字について以下のように述べている。

通仮は仮借とも呼ばれる。同音または近似の音を用いて本字に代替する現象をさしている。厳密には、それに相当する字が

もともと存在しない仮借とは異なるとしなければならぬが、一般には両者を包括して通仮とか仮借の名のもとに通用させている。大別して、(a)同音通仮、(b)双声通仮、(c)疊韻通仮の三種をあげることができる。(a)の例とは「公」を借りて「功」に用い、「誓」をかりて「予」に用いるようなものであり、(b)は、「監」を借りて「苦」に用い、「依」を借りて「隱」に用いること、(c)は「直」を借りて「職」に用い、「沈」を借りて、「淫」に用いるといった例である。

通仮字の認定は極めて難しいことである。同音の漢字は必ずしも通仮字とはいえない。ここでは、『漢語大詞典』と通仮字に関する諸字典を使い、通仮字を認定することにした。通仮字諸字典は『通仮字小字典』（夏劍欽、夏炳臣 一九八六年一月湖南人民出版社）『通仮字手冊』（周盈科 一九八八年三月江西教育出版社）『常用古今字通仮字字典』（賈延柱 一九八八年一〇月遼寧人民出版社）である。これらの字典は中学生、大学生向けの学習資料であるため、いずれも参考にする程度である。

例をあげてみれば、通仮字は次のようなものがある。  
『漢語大詞典』を見てみると、

- （第七卷五六三頁）恵通「慧」聡慧、心里聡明（聡明である）
- （第十卷八〇一頁）蹟同「迹」、跡同「迹」脚印、足跡（あしあと）

- （第五卷七六一頁）智同「知」知道（分かる）
- （第十一卷四九三ページ）辨通「辯」辯解分説（弁解、言いわ

けをする）

右の指摘に従い、「恵・慧」、「跡・蹟・迹」、「智・知」、「辨・辯」は通仮字と認定ができる。

日本語でも、これらの字を同様に通仮字として用いている。このような日本語にある通仮字については別の検討にゆずる。

### 三、日本漢語に存在している通仮現象

中国語では、通仮字は単字の形で文献に現れている。日本語の場合は中国語と違い、単字より熟語の形で文章に用いられることが多い。

例を挙げてみると、明治の文献では、「まこと」のころ。まこところ。丹心」の意味を表現するとき、「丹精」あるいは「丹誠」を使っている。「精と誠」は中国語では、古い時代から音が異なる。『廣韻』によると、反切は「精、子盈切」「誠、是征切」になっている、二字の反切が違う。現代中国語でも、「精 jīng 誠 chéng」になっている、声母も韻母も異なる。従って、通仮字として使用されていない。

然し、日本語では、『黒川本色葉字類抄』によれば、「精」と「誠」の漢字音表記は同じ「セイ」である。日本漢字音では、「精」と「誠」は同音になったため通仮字として使える可能性が高くなった。漢語熟語「タンセイ」を漢字で表現するとき、「丹精・丹誠」になっている。しかし、「精」と「誠」は他の漢語熟語において、通用さ

れることがなくて、「タンセイ」のみ、特定の漢語において、二字は通仮字のように使用されている。このような場合、「精」と「誠」は通仮字ではないので、「丹精」と「丹誠」を通仮現象と考えればよいのではないかと思われる。漢語熟語に現れることは日本語通仮現象の大きな特徴である。特定の漢語において、通仮現象が起こることも日本語通仮現象の一つの特徴である。

本研究では、本来漢語と日本製漢語を分けて、二つの立場から通仮現象について検討する。まず、本来漢語における通仮現象から検討する。

#### (一) 本来の漢語に現れる通仮現象

通仮現象は日本語の本来漢語に於いて現れる様子を分析する前に、まず、本来の漢語の範囲を決めるべきである。

陳力衛『和製漢語の形成とその展開』<sup>14</sup>（五頁）では、純漢語について、以下のように述べている。

純漢語（中国由来の語）（省略）「純漢語」の範囲は漢訳仏典語を含むかどうかで多少異論があるが、今はおおむね含む方向で一致している。

『日本語百科大事典』<sup>15</sup>（四二二頁）

漢語は元来、中国で外国語に対し自国語のことをこう自称したのである。日本でも中国起源の語の意味で使うが、ふつう近世以降の中国語を指すことはなく、狭義では呉音・漢音で読むものを言い、広義では字音語一般を言う。

本研究では、古代中国から日本に伝わってきた漢語を本来漢語と呼ぶことにした。明治期の作品を調査すると、本来漢語の場合も含めた通仮現象は以下の用例がある。

記憶・記憶 回復・恢復 看破・觀破 伎倆・技倆  
 結構・結構 原因・原因 検査・検査 構造・構造  
 交代・交替 刺激・刺戟 失策・失錯 熟練・熟練  
 親切・深切 震動・振動 粗忽・疎忽 丹誠・丹精  
 丁寧・丁寧 顛倒・顛倒 顛覆・轉覆  
 反復・反覆 冥途・冥土 模型・摸型 模索・摸索  
 模様・模様 豫期・預期 老練・老鍊 連接・聯接  
 容態・容體

本来漢語に存在する通仮現象は辞書に於ける現れ方と明治三〇年代の実際の文献における現れ方を検討して、研究を進める。通仮現象は本来漢語では、更に、二つのパターンで現れている。

パターン

そもそも意味が異なり、漢字音も違う漢語は、日本語に入った後、同音同義語になり、つまり通仮現象になる用例が九組ある。ここでは、「回復・恢復」、「交代・交替」を例にし、議論を進める。

回復・恢復

「回復・恢復」は本来の漢語として、中国語にも日本語にも使われている。

『廣韻』によると、反切は「回、戸恢切」「恢、苦回切」になっている。中国語では、音が近いとしか言えない。『韻鏡校本』によれば、原音復元は「回<sup>huai</sup>、恢<sup>k'uai</sup>」になっている。現代中国語では、「回・恢」の発音を拼音で示すと「hui huī」であり、同音であるが、四声が違う。

中国語では、声母「k k' h」は日本語に入った後、「カ」行音として取り入れられる。韻部「uai」は日本語に入った後、漢音「アイ」異音「エイ」になった。日本語では、『色葉字類抄』において、「回・恢」は次のように現れている。

前田本・辞字 <sup>クワイ</sup> 恢ヒロム  
 黒川本・辞字 <sup>クワイ</sup> 回

そもそも漢字音の違う「回・恢」は日本語に入った後、同音になった。中国語では通仮字として使われるはずのない漢字は日本語では同音になって、通仮字として使われる可能性が高まってきた。

『漢語大詞典』によれば、「回復」は「復原、恢復」という意味があるが、これより「回報、答覆」の意味が広く使われている。「恢復」は「凡失而复得或恢复原状皆称“恢復”」（凡そ、失われたものを取り戻したり、原状に復元したりすることは「恢復」と呼ぶ。）という意味である。中国語では、場合によって「回復・恢復」は、同義語として扱われているが、意味が微妙に違う。

日本語では、「一度失ったものをとりもどすこと」を漢語熟語で表すときのみ、「回・恢」を通仮字のように用いているため、「回・

「恢」を通仮字として認定せずに、「回復・恢復」を通仮現象として考えてよからう。

日本明治期の辞書及び文献では、以下のように現れている。

『新令字解』

クワイフク  
回復 モトヘ

『漢語字類』

クワイフク  
回復 モトヘ

『必携熟語字集』

クワイフク  
回復 カハル  
カヘス  
カヘス

『新編漢語字林』

クワイフク  
回復 カハル  
カヘス

『言海』くわいふく

回復

『広辞苑』かいふく 回復・恢復

各患者は既に恢復期に向ひたれば（『読売新聞』三六年一月

二六日）

米国市場の回復（『読売新聞』明治二十九年一月二二日）

昨日に至り頓に回復の模様なる（『読売新聞』明治三二年四月

月二四日）

十分に勇気を回復なし（幸田露伴『真西遊記』）

愛の恢復を望んで居るから（国木田獨步『涛声』）

御恢復に向暇舌（山田美妙『美妙集』）

勇気も恢復するので（山田美妙『美妙集』）

頭が恢復したのであらう（森鷗外『煙塵』）

### 交代・交替

『広辞苑』では、「交代・交替」は同じ項目に現れている。明

治期の文献にも同じ意味として使われている。辞書及び明治期文

献では、以下のように現れている。

『色葉字類抄・黒川本』

交代 割更部  
カウタイ

『必携熟字集』

交代  
カウタイ

『新編漢語字林』

交代  
カウタイ

『言海』かうたい

交代・交替

五月占領軍交代と共に内地憲兵を交代せしむる。（『読売新

聞』明治三〇年一月一六日）

赤城は愛宕と交代して（『読売新聞』明治三二年四月二八日）

香港の支店長を交替させるから（幸田露伴『露団々』）

君主の参勤交代に附随したる（徳富猪一郎『文学断片』）

新陳交代スルガ故ニ其乾燥頗速ナリ（森鷗外『衛生新篇』）

現代日本語には、「代・替」は漢字音が同じ「タイ」である。「韻

鏡校本」の原音復元に従うと、「代」<sup>1</sup>「dai」、替<sup>2</sup>「t'ei」ということで

あり、声母も韻母も違う。『廣韻』によると、反切は「代、徒耐切」

「替、多計切」である。現代中国語では、発音を拼音で示すと「代

dai」「替 ti」になっていて、発音が異なる。通仮字として考え

られない。

日本語に入るとき、声母の「d」「t」音がタ行音になり、韻部「ei」

「iei」が漢音「アイ」、呉音「エイ」になった。『黒川本色葉字類抄』

により、「代と替」の漢字音表記は同じ「タイ」である。即ち、中

国語では、発音の違う「代・替」は日本語に入った後、同音にな

った。

日本語では、「交代・交替」は通仮現象として、使われているが、

中国語では「交代」と「交替」は意味の違う言葉である。『漢語大詞典』によると、意味は次の通りである。

交代：前後任引き継ぐ。渡す。言いつける

交替：引き継ぐ

日本語の「交代・交替」は、中国語の「交代・交替」と異なり、同義語として使われている。意味は「代わり合うこと。入れ代わること」である。字面では、日本語と中国語においては、全く同じであるが、意味が異なる。中国語では無関係の二語は日本語では通仮現象として使われている。

このように、字面では中国語でも、日本語でも同じ漢語熟語は中国語では意味が異なり、日本語のみ通仮現象として使われている用例は「回復・恢復」「交代・交替」のほかには、「結構・結構」「構造・構造」「親切・深切」「粗忽・疎忽」「丁寧・丁寧」「豫期・預期」などがある。

### パターン

本来漢語熟語に現れる通仮現象にはもう一つパターンがある。通仮現象になる両漢語の中で、一方が本来の漢語であり、もう一方が本来漢語に基づいて作られた言葉である。新たに作り出された言葉は元の本来漢語と通用し、通仮現象になっている。日本製漢語である。ここでは、「記憶・記憶」、「顛倒・轉倒」、「原因・原因」を例として、このような通仮現象を分析してみる。

### 記憶・記憶

『落葉集』 記き憶き

『書言字考節用集』 記き憶き

『漢語字類』 記憶き

『新編漢語字林』 記き憶き

『必携熟字集』 記憶き

『言海』 きおく 記憶

『広辞苑』 きおく 記憶

「記憶・記憶」は江戸時代から明治時代にかけての辞書には両方とも現れている。明治期の文献でも同じように「記憶・記憶」の形で用いられている。

和田氏の記憶術（『読売新聞』明治三年五月二二日）

記憶して置いて貰いたいとの家である（『読売新聞』明治三

五年九月七日）

時共に隠れし記憶ある（幸田露伴『さゝ舟』）

記憶に残る店がまへ（樋口一葉『一葉全集』）

我邦人民の記憶シテ今日二忘レサル（矢野文雄『経国美談』）

見たやうに記憶して居ますが（森鷗外『人種哲学梗概』）

読者の記憶のしからしむるなり。（森鷗外『月草』）

『韻鏡校本』により、「憶・憶」の原音復元は、同じ「i:k」である。『黒川本色葉字類抄』では「憶・憶」になっている。漢字音が同じで、形も似ているため、日本語には、とくに明治期では、「記憶・記憶」は通仮現象として用いられている。

中国語では、「記憶」は古くから使われてきた。『隋書』儒林・何妥伝「臣少好音律、留意管絃、年雖耆老、頗皆記憶」である。意味は「覚え取った、忘れず」である。「記憶」は「胸の中に覚える」という意味で、古い用例がなくて、章炳麟『文学説例』には「即便於吟詠、而記憶為易」に現れている。章氏は中国、清末民国初の革命家・学者で、日本で暮らした経験もあるため、「記憶」は日本から中国に逆輸入語の可能性がある。

顛倒・轉倒

『落葉集』 顛倒 てん だう

『古本節用集・易林本』 顛倒 テンダウ

『書言字考節用集』 顛倒 テンダウ

『必携熟字集』 顛倒 テンダウ 轉倒 テンダウ 顛倒 テンダウ

『新編漢語字林』 顛倒 テンダウ 轉倒 テンダウ 顛倒 テンダウ 轉倒 テンダウ

『言海』 てんたう 顛倒 轉倒

『広辞苑』 てんとう 顛倒・顛倒

得三は轉倒して血眼になりぬ（泉鏡花『活人形』）  
私は気が顛倒して居ます（国木田獨歩『獨歩集』）

既己顛倒、面所引臨濟（森鷗外『月草』）

混々池々黑白の顛倒するもの（末廣重恭『雪中梅』）

轉倒可惜衣類と袴を大なしにして（『読売新聞』明治三〇年一月四日）

川の橋脚轉倒（『読売新聞』明治三三年五月二七日）

中国語では、『廣韻』を調べてみると、「顛、都年切」「轉、陟亮切」になっていて反切が違う。現代中国語では、拼音は「顛 diān 轉 zhuǎn」である。声母も声調も違ったため、通仮字として考えられない。「顛倒」は中国語にあり、意味は日本語と同じ「さかさになること。倒れること」である。「轉倒」は中国語には存在せず、日本製漢語である。

『韻鏡校本』により、原音の復元は、「顛 [ten ien]」と「轉 [ten ien]」になって、声母が近いが、韻母が異なる。日本語に入るとき、「[d]」と「[t]」はタ行音になり、「[ien]」と「[uen]」は「エン」になった。『前田本 色葉字類抄』によると、「顛・轉」は漢字音表記が同じ「テン」である。本来、中国語では漢字音の違う「顛」と「轉」は日本語に入った後、同音「テン」になった。通仮字として使える可能性が高くなった。

「顛倒」は本来の漢語であるが、「轉倒」は日本製漢語である。筆者の調査によると、明治期以前には、「轉倒」は見出されない。明治期から辞書に現れてきて、文献に盛んに使われている。その原因は「顛・轉」が同音になったことである。

原因・要因

『落葉集』 原因 げん げん 源 げん

『必携熟字集』 原因 ゲン 原因 ゲン 源 ゲン 原因 ゲン 源 ゲン

『言海』 げんいん 原因

『広辞苑』 げんいん 原因

原因を虚偽に置きたくない。(国木田独歩『独歩集』)

偏屈の原因であるから、忽ち青筋を立て、了つて(「)

犯罪の原因と探偵の秘密は(泉鏡花『活人形』)

其が原因だ(泉鏡花『錦帯記』)

今其原因を聞くに(『読売新聞』明治三十九年二月二日)

教民暴行の原因(『読売新聞』明治三十九年二月二〇日)

右に書いたように、明治期には、事物の変化を引き起こすもの  
の意味を漢語で表すとき、「原因・原因」を使っていた。「原因」  
は中国明清時代から登場してきた。「原因」は中国語には現れてい  
ない。

中国語では、「原・源」は『廣韻』により、反切が同じ「愚袁  
切」である。現代中国語で、発音を拼音で示すと同じ「yuán」である。

『色葉字類抄』によると、「原・源」になつていて、日本語に  
おいても、「原・源」は古い時代から音が同じ「クエン」である。

『韻鏡校本』で、原音復元も同じ「<sup>u</sup>u<sup>a</sup>」である。現代日本語でも、

漢字音が同じ「ゲン」である。「源・原」は同音で、亦、字形も似  
ているため、「原因」は「原因」と同じように使うようになったと  
考えられる。「原因」は漢語由来語であるが、「原因」は「原因」  
の構造を模倣して作られた言葉である。

日本語では、本来漢語を模倣して、同音の漢字を使い、通仮字  
の原理で、新しい言葉を作り出す場合がある。前起の言葉は後起  
の言葉と一緒に通仮現象として使われている。「記憶・記憶」「顛

倒・転倒」「原因・原因」のほかに、次のような用例もある。

看破・観破 伎倆・技倆 検査・検査 構造・構造

刺激・刺戟 熟練・熟練 顛覆・轉覆 模型・模型

摸索・摸索 冥途・冥土 老練・老練

(二) 日本製漢語における通仮現象

日本で作られた漢語は日本製漢語、和製漢語などの呼び方があ  
る。このような漢語について、以下の先行研究がある。

山田孝雄(一九五八年)『国語に於ける漢語の研究』(16)(二五  
頁)

なほこの漢語の及ぼせる影響は深く国語の上に及びて、日  
本製漢語、漢語式日本語ともいふべきをも生ぜり。即ち

一、漢語を基としてつくりたる日本語

一、漢語を基にしてつくりたる日本製漢語

一、はじめより日本語としてつくりし漢語形式の語

佐藤喜代治「和製漢語の歴史」(17)(七一頁)

わが国で作つたと考えられる漢語で、これに該当する固有  
の国語が無く表意文字としての漢字を組み合わせて熟字を作  
り、これを字音で読むものがある。実際にはこの種の漢語が  
極めて多く、また、次々と新たに作り出されてゆくのである  
が、これも広義においては和製の漢語と言つていいであらう。  
それらは、本来の漢語をモデルにして造り出されるのである  
が、その語がもと中国に存在したかどうかを顧みること

なく、また、日本語の造語法、または日本人の発想は影響される点もあつて、本来の漢語か和製の漢語かを区別することが実際には困難である。また、わが国で作りに出した漢語が中国に伝えられて普及しているものも少なくないと考えられる。

陳力衛『和製漢語の形成とその展開』（三〇頁）

以上から和製漢語の条件はすくなくとも

- (1) 漢語構造に基づいている
- (2) 字音読みの語
- (3) 本来の漢籍（中国語）にない
- (4) 日本で作られたもの

中国から伝わってきた漢語を摸倣して、日本人の発想で作られた漢語を日本製漢語や和製漢語などと称しているが、本研究では、このような漢語を「日本製漢語」と呼ぶことにする。

文献調査によると、日本製漢語には通仮現象と考えられる用例は一九組であり、以下のようである。

- |       |         |       |       |
|-------|---------|-------|-------|
| 愛嬌・愛敬 | 愛想・愛相   | 一緒・一所 | 憶説・臆説 |
| 癩癩・肝癩 | 肝腎・肝心   | 強情・剛情 | 辛抱・辛棒 |
| 難儀・難義 | 不思議・不思議 | 不思議   | 返事・返辞 |
| 未練・未練 | 無残・無惨   | 無慚・無慚 | 用捨・容赦 |
| 理屈・理窟 | 流儀・流義   | 了見・了簡 | 料見・料簡 |
| 露頭・露見 |         |       |       |

本研究では、「愛嬌・愛敬」「愛想・愛相」「癩癩・肝癩」「辛抱・辛棒」「返事・返辞」「無残・無惨・無慚・無慚」「用捨・容赦」「露

頭・露見」を例として、日本製漢語における通仮現象が使用される様子と成立する原因を検討してみる。

愛嬌・愛敬

現代日本語には「愛嬌・愛敬」は音が「アイキョウ」である。

「愛敬・愛嬌」は辞書における現れ方は以下のものである。

- 『古本節用集・黒本本』  
有敬 アイキョウ
- 『古本節用集・易林本・饅頭屋本』  
愛敬 アイキョウ
- 『古本節用集・明心本』  
愛敬 アイキョウ

- 『落葉集』  
愛敬 あい きやう
- 『書言字考節用集』  
愛敬 アイキョウ

- 『節用集大全』  
愛敬 あい きやう

- 『必携熟字集』  
愛敬 アイキョウ

- 『新編漢語字林』  
「愛」アイ、メテ、イツクシ、カハユガル、ケツ、カハユラ、ケイ、イツクシ、ム  
嬌 ケツ、カハユラ、ケイ、イツクシ、ム  
敬 ケイ、イツクシ、ム

『韻鏡校本』により、漢字音復元は敬[klɛŋ]、嬌[klɛu]である。声母の「k」は日本語に入った後、カ行音になり、「lɛŋ」は日本語に入るとき、漢音「エイ」呉音「ヤウ」になり、「lɛu」は日本語に入るとき、漢音「アウ」呉音「エウ」になった。『前田本色葉字類抄』には「敬キヤウ」「嬌ケウ」という形で示している。「嬌」と「敬」の

漢字音が違う。ただ、女性や子供などが、にこやかでかわいらしいことという意味を表わすとき、「愛嬌」と「愛敬」は同じ言葉として使われる。このように、そもそも音の違う「嬌」と「敬」は「あいきょう」のみ通仮字のように使っている。日本語における長音の成立によって漢字音が一緒に「キョー」になった。通仮現象である「愛嬌・愛敬」は意味の影響を受けて、成立したと考えられる。

「愛嬌・愛敬」は明治期作品において、以下のように現れている。

加藤氏は流石商売柄の愛嬌よく逸六を玄關まで送り行きて

(『読売新聞』明治三〇年五月五日)

愛敬女学校の没落(『読売新聞』明治三六年四月一二日)

例の滴るばかりの愛嬌(幸田露伴『露団々』)

愛敬館といふに足を休めて(幸田露伴『勇魚捕』)

眼に愛嬌の愛窪に涙を湛へつ(泉鏡花『冠弥左衛門』)

微塵愛敬のなきに(樋口一葉『一葉全集』)

男振よく愛敬あり(森鷗外『月草』)

### 愛想・愛相

「人に接して示す好意や愛らしさ」を漢語熟語で表現するとき、『広辞苑』では、「愛想」になっているが、明治時代には「愛想」だけではなく、「愛相」も使われていた。

『落葉集』

愛あい想きょう

『書言字考節用集』

無愛想アイサウ

『新編漢語辞林』

愛想サウ 日本デ人ニタイシテモ  
テナシニアラハスコ、ロ

『言海』 あいさう

愛想

諂諛及び愛相(『読売新聞』明治十九年六月二六日)

屢々なるよりお光も終に愛想を尽かし(『読売新聞』明治三〇年二月二五日)

〇年二月二五日)

口はきかめと愛想尽し(幸田露伴『勇魚捕』)

全然無愛相に飲まぬといへば(〃)

此の男が精一杯の愛想にいつたので(泉鏡花『錦帯記』)

愛相が尽きたんでせうよ(泉鏡花『風流線』)

無愛相極まる人で別(国木田獨歩『涛声』)

『韻鏡校本』によると、原音復元は、想が養上声「siaŋ」になり、

相が漾去声「siaŋ」になっている。『古代音韻表稿』では、ともに陽部

開口「siaŋ」に現れているが、「想」は陽上声で、「相」は陽去声であ

る。「想と相」は古代から現代にわたって同音である。日本語にお

いても漢字音が同じである。『前田本色葉字類抄』には「相サウ」

になっている。『黒川本色葉字類抄』には「想サウ」になっている。

「愛想・愛相」と同じように「可哀想・可哀相・可愛さう」の

用例もあつたが、この言葉は漢語ではないため、本研究では研究

対象として取り上げていない。しかし、「愛想・愛相」と「可哀想・

可哀相」を通して、明治期には「想・相」は通用されたことが一

目瞭然である。

### 癩癩・肝癩

『広辞苑』によると、「癩癩」は「神経過敏で起こりやすい。また、怒り出すこと」という意味であるが、明治期に「癩癩」だけではなく、「肝癩」も同じ意味として使われていた。具体的な用例は以下のものである。

伊藤候中津に肝癩を起す（『読売新聞』明治三二年五月二二日）

癩癩を起こし（『読売新聞』明治三七年二月六日）

述りに嘲れば肝癩（泉鏡花『冠弥左衛門』）

辞書では、以下のとおりに現れている。

『古本節用集・黒本本』

『書言字考節用集』

『新編漢語字林』

『言海』

『色葉字類抄』

田本色葉字類抄』に現れている。『韻鏡校本』によれば、原音復元

は癩<sup>h</sup>an<sup>h</sup> 肝<sup>kan</sup>である。声母<sup>h</sup>は日本語に入った後、力行

音になり、母音の<sup>an</sup>は日本語に入った後、「アン」になる。

日本語では「癩・肝」は同音「カン」になる。

「癩癩・肝癩」の成立を考える場合、同音だけではなくて、意味の影響も考えなければならない。「癩」は「感情が激しい、激怒しやすい性質」である。同じ、激怒を中国語で表現するとき、「肝火」である。「肝・癩」は日本語において、音が一緒に「カン」であるし、意味も似ている理由で、明治時代の人々は「癩癩・肝癩」

を一緒に使っていたのではなからうか。

### 辛抱・辛棒

「つらさをこらえしのぶこと」を漢語熟語で表現する場合、『広辞苑』では「辛抱」になっている。明治期の文献には、「辛抱」のほかには「辛棒」も現れている。次のとおりである。

辛抱しかねての縊死（『読売新聞』明治三二年六月二九日）

女寅の辛棒（『読売新聞』明治三九年六月五日）

此上辛抱といふ事（幸田露伴『勇魚捕』）

三年以来辛抱して（泉鏡花『活人形』）

嘘か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ（樋口一葉『一葉全集』）

辛棒出来んのは高山（国木田獨歩『獨歩集』）

平常辛抱強い百合さんも（森鷗外『煙塵』）

『廣韻』には「棒、歩頂切」「抱、薄浩切」になっている。現

代中国語では、拼音は「棒<sup>bang</sup>」抱<sup>bāo</sup>」になって、母音と開合の

違いがある。「抱・棒」は『韻鏡校本』により、原音復元は「抱<sup>ba</sup>」

棒<sup>baŋ</sup>」であり、字音が違つ。通仮字として考えられない。日本

語に入るとき、声母の「b」はバ行音になり、韻部の「au」と「ou」は同

じ「アウ」になった。漢字音表記は『前田本色葉字類抄』による

と、「棒<sup>ハウ</sup>」「抱<sup>ハウ</sup>」になっている。日本語では「棒と抱」は

同音になり、通仮字として使われる可能性が現れてきた。日本製

漢語「辛抱」は明治期以前の辞書には現れていない。明治期の辞

書では次のとおりに現れている。

『必携熟語字集』

辛抱 シンバウ  
ヨコラヘル

『新編漢語字林』

辛抱 シンハウ  
バウトヨム

『言海』 しんぼう

辛抱 クヘシノフ

明治期の辞書には「辛抱」しか現れていないが、実際の文献には「辛抱」と同じ意味で「辛棒」もよく使われた。「しんぼう」以外には「抱と棒」を通仮字のように使う用例はなかった。日本語では、「抱」と「棒」は同音であり、通仮字のように使われ、和製漢語「辛抱・辛棒」を作り出したと考えられる。

返事・返辞

「返事・返辞」は「かえりごと」から変化して、代表的な日本製漢語である。明治三〇年代には、以下のように使われた。

ちエリいの所え返辞をしてから(幸田露伴『露団々』)

じゃくそのん返辞を考えれば(〃)

お前の返詞がおれの腹には落ち兼ねる(森鷗外『煙塵』)  
其返事をして程なく(末廣重恭『雪中梅』)

直接に返事をして呉れる(国木田独歩『独歩集』)

辞書の現れ方、次のようになっていいる。

『古本節用集・饅頭屋本・易林本』

返事 ヘンシ

『落葉集』

返事 ヘンシ

『大全早引節用集』

返事 ヘンシ

『新編漢語辞林』

返辞 ヘンジ  
辞 ジ

事 ジ

『言海』

へんじ

返事・返辞

『広辞苑』

へんじ

返事・返辞

辞書の現れ方により、「返事・返辞」は明治期から今日にいたつて通仮現象として使われてきた。『韻鏡校本』により、漢字音復元は「事」[dzi:ei]「辞」[z]ieiである。声母「dz」は日本語に入るとき、漢音サ行音、呉音ザ行音になり、母音の「iei」は漢音「エイ、エイ」呉音「アイ、エ、エ」になった。『色葉字類抄』によると、「事・辞」の漢字音表記は「シ」であり、通仮字として使われる可能性が現れてきたが、「事と辞」は日本語において同音であるため、「返事・返辞」が成立したと考えられる。

無残・無惨・無慚・無慙

「無慚」は仏教用語で、元の意味は『広辞苑』によると、「罪を犯しながら、みずから心に恥じないこと」である。本来の漢語と認識すべきであるが、日本語では、「残酷なこと。いたわしいこと」の意味として広く使われている。日本語での使い方は本来の意味と離れているため、ここでは、日本語製漢語として考える。辞書における現れ方及び明治期文献には以下の通りである。

『色葉字類抄・前田本』

無慚 ムザン

『古本節用集・饅頭屋本・易林本』

無慚 ムザン

『書言字考節用集』

無慚 ムザン

『必携熟語字集』

無慚 ムザン  
ハチシ

『新編漢語字林』  
 『言海』 むざん  
 〔無〕 残<sup>ザン</sup>  
 無慙

其死体は無惨至極の有様にて（『読売新聞』明治三二年十一月二四日）

無残の最後を遂げた（『読売新聞』明治三七年六月一日）

三人も無残や鶴に（幸田露伴『露団々』）

不幸におとわは無惨や葬られぬ（幸田露伴『さゝ船』）

無惨や身内の皮は裂け（泉鏡花『活人形』）

貪欲無残の心にて思ふて（泉鏡花『冠弥左衛門』）

無残な物音（泉鏡花『風流線』）

無慚なる扱を受けむといへり（森鷗外『月草』）

無慙なる事も正更にて見るとき（〃）

『韻鏡校本』によると、原音復元は「惨」<sup>[ts'əm]</sup>「残」<sup>[dzan]</sup>「慙」<sup>[dzam]</sup>「」であり、声母も韻母も異なる。日本語に入るとき、「ts' dz」は漢音サ行音、呉音ザ行音になる。韻部「an」は「アン」になる。『色葉字類抄』によると、「残・惨・慙・慙」は音が同じ「サン」である。「残・惨・慙・慙」共に「惨め」という意味を持つため、「無残・無惨・無慙・無慙」は同音だけではなく、意味の影響もうけて成立した言葉である。

用捨・容赦

日本製漢語「用捨・容赦」は明治期において以下のように使われた。

不純潔なる分子に向かつては容赦なく（『読売新聞』明治三五年六月二四日）

水の使用にも用捨なし（『読売新聞』明治三九年六月一日）

棍棒を取りて用捨なく追立てしめ（泉鏡花『冠弥左衛門』）

御容赦下さい（泉鏡花『風流線』）

武士は用捨無く（山田美妙『美妙集』）

不審奴と思へば容赦なく（末広鉄腸『南洋乃大波瀾』）

辞書における現れ方は以下のようである。

『色葉字類抄・前田本』 用捨 ヨウシヤ

『古本節用集・明応本・黒本本・饅頭屋本』 用捨<sup>ヨウシヤ</sup>

『落葉集』 用捨<sup>ヨウシヤ</sup>

『書言字考節用集』 用捨<sup>ヨウシヤ</sup>

『必携熟語字集』 容赦 ユルス

『新編漢語字林』 容赦<sup>ヨウシヤ</sup> ユルス、  
 容赦<sup>ヨウシヤ</sup> カンベンズル

『言海』 ようしや 容赦

『廣韻』によると、反切は「用、余送切」「容、餘封切」「捨、書治切」「赦、始夜切」である。『韻鏡校本』によれば、原音復元は「用」<sup>[j]ioŋ</sup>「容」<sup>ʋioŋ</sup>「捨」<sup>ʃiã</sup>「赦」<sup>ʃiã</sup>は同じ「iã」である。「用・容」の元の声母は日本語に入った後、ヤ行音になり、母音の「ioŋ」

は日本語では、漢音「オウ」呉音「ウ」「オ」になり、『色葉字類抄』によると、「用・容」は漢字音表記が「ヨウ」であり、同音になった。「捨・赦」は元の漢字音が同じで、日本語に入った後、「シヤ」になった。

「容」は「許す。入れる。また、ききいれる」意味があり、「赦」は「ゆるす。大目にみる。」などの意味があるため、「容赦」は「許す」の意味を持つ。「ゆるす。ひかえめにすること」を意味すると、**「容赦・用捨」は同義である。**

「容赦・用捨」は同じ言葉として使われる理由は「容赦・用捨」は同音であるほかにはない。「用捨」は通仮字の原理で日本人が自分の発想で作った日本製漢語である。

「容赦」は中国語でも使われている。日本語と同じ意味で「大目で許す」の意味である。古い用例がなくて、郭沫若『落葉』「丝毫沒有隱蔽地认真忏悔的时候、我们可以玩味到完全得救、完全得被容赦的恩泽上来、我真正由衷地感谢了」一例しかない。郭氏は日本で長く生活した経験があるので、「容赦」は日本から中国に伝わった日本製漢語の可能性が高い。

**露頭・露見**

明治期において、「露頭・露見」は以下のように使われている。

露頭を恐れての刃傷（『読売新聞』明治三六年二月一三日）  
 中村竹次郎が旧悪露見と覚悟して（『読売新聞』明治三三年

八月二七日）

悪事の段々悉一露頭（幸田露伴『勇魚捕』）

世に出なば悪事の露頭は瞬く間と（泉鏡花『活人形』）

あはや露頭して直義の耳に入る（山田美妙『美妙集』）

陰謀の露見するのは知れたことである（末広鉄腸『南洋乃大

波瀾』）

辞書における現れ方は次の通りである。

『色葉字類抄・前田本』 露頭 ロケン

『古本節用集・伊京集・明心本・黒本本・易林本』 露頭 ロケン

『書言字考節用集』 露頭 ロケン

『新編漢語字林』 露見 ケン

『必携熟字集』 露頭 ロケン

『言海』 ろけん 露頭

辞書調査と文献調査によると、明治期以前から「露頭」は辞書に現れていて、古い言葉である。

『韻鏡校本』により、**「頭・見」の原音復元は、頭 hen ien** 見 ken ien になっている。「k・h」は日本語に入るとき、力行音になり、「en」は「エン」になる。『色葉字類抄』には、「露頭ロケン」と、「見ケン」がある。中国語では元々漢字音の違う「頭・見」は日本語に入った後、同音になり、また、意味も同じ「アラウス」である。通仮現象である「露頭・露見」の形成は同音だけではなく、意味の影響も受けたと考えられる。

「露見」は中国語には存在している。

『礼記』月令「象物露見不陰蔽、虎豹之属恒浅毛」

『漢書』王嘉伝「臣謹封上詔書、不敢露見」

漢籍に現れている「露見」は「現れる」という意味で、日本語の「露頭」の「隠していた事があらわれること。ばれること」の意味がない。日本語では「露頭」古い和製漢語であり、「露見」は「露頭」の通仮現象として用いられ始めたか、それとも、元々中国語にある言葉を借りて用いられ始めたかについてもっと調査を広めていく必要がある。

### （三）、結論

通仮現象は日本漢語では、広く使われている。本研究は、日本語における通仮現象を通覧し、まとめたものである。

イ、中国語では、通仮字は単字の形で用いられることに対して、日本語では、漢語熟語の形で現れることが多い。

ロ、日本語では、「精・誠」は同音であるが、「丹精・丹誠」以外には、「精・誠」は通仮字のように使われていない。このような、特定の漢語にしか現れていない通仮現象は数多くある。次のようなものである。

愛嬌・愛敬 愛想・愛相 惡逆・惡虐 一緒・一所  
 回復・恢復 癩癩・肝癩 肝腎・肝心 看破・觀破  
 原因・源因 強情・剛情 交代・交替 刺激・刺戟  
 失策・失錯 親切・深切 震動・振動 辛抱・辛棒  
 粗忽・疎忽 丹精・丹誠 丁寧・丁寧 丁寧・丁寧

反復・反覆 返事・返辞 無残・無惨・無慚・無慙  
 用捨・容赦 冥土・冥途 容態・容體 豫期・預期  
 理屈・理窟 了見・了簡 料見・料簡  
 連接・聯接 連結・聯結 露頭・露見  
 八、本来漢語に現れる通仮現象は音形と字形の影響を受けて成立すると考えられる。

（一）本来漢語における通仮現象は音形が同じ、或は似ているため成立すると考えられる。そもそも、音形の異なる語は日本語に入った後、音形が同じになり、日本語では、通仮現象として扱われている。国語学では「通仮字」とは明言されていないが、「通仮」の意識は日本人がすでに持っている。

（二）通仮現象である二漢語のうち、一方は本来の漢語であり、もう一方は本来の漢語に基づいて、音形が同じであるため、通仮字的に扱われる用例もある。このような通仮現象は「顛倒・転倒 顛覆・轉覆 反復・反覆 冥土・冥途」などがある。

（三）本来漢語における通仮現象が成立について、音形が同じである以外、字形の要素も考慮しなければならない。音形が同じである上、字形が似ている理由で成立する通仮現象もある。以下のようなものである。

愛想・愛相 憶説・臆説 記憶・記憶 技倆・伎倆  
 結構・結構 原因・源因 検査・檢査 構造・構造  
 熟練・熟練 丁寧・丁寧 模型・模型  
 摸索・摸索 模様・模様 老練・老練

二、日本製漢語に存在する通仮現象の成立は先ず、漢字の音形が似ていて、或は同じである必要があるが、その他には、意味的な影響はないとはいえない。

### 結び

今回の調査によって、中国古代から使われてきた通仮現象は日本でも広く使われ、しかも変化が起ったことが明らかになった。日本には通仮字だけではなく、通仮字が含まれ、通仮現象は広く存在しており、日本人の独特な漢語に対する理解で成立したと考えられる。本研究は熟語の通仮現象について概観的に言及するに止まったが、今後の課題として、以下の面で検討する必要がある。

- (一) 日本語に於ける通仮字
- (二) 通仮現象は形成される理由
- (三) 通仮現象の部分的消滅

### ^注

- (1) 宋春玲「明治期翻訳作品における同音・異形・同意漢語」『現代社会文化研究 第三五号』二〇〇六年三月。
- (2) 中田祝夫『古本節用集六種研究並びに総合索引』一九七九年 風間書房、『伊京集』、『明応五年本節用集』、『天正十八年本節用集』、『饅頭屋本節用集』、『黒本本節用集』、『易林本節用集』六種。
- (3) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『慶応四年版落葉集本文・解題・索引』昭和三十七年一〇月一五日発行。
- (4) 中田祝夫『書言字考節用集研究並びに索引影印編』一九七九年 風間書房。

(5) 『新令字解』の作者は荻田嘯である。慶応四年に出版して、九〇四語を収録している。慶応四年・明治元年当時の文献、あるいは談話中の漢語が収集された辞書である。その後の漢語辞書に大きな影響を与えた。

(6) 『漢語字類』の作者は庄原謙吉で、明治二年出版された。この辞書は、掲出語数から言っても、また組織の点でも、この期の最初の本格的な漢語辞書であり、この後の漢語辞書大きな影響を与えた辞書である。語数は四三四〇語。配列は編者の創設した、独特の部首を含む頭字による部首配列である。

(7) 『必携熟字集上・下巻』明治二年五月発行。

(8) 『新編漢語辞林』明治三十七年二月刊 折衷漢語辞書ではあるが、当代漢語辞書に近い。

(9) 大槻文彦『言海』二〇〇四年七月十日第四刷発行 本書は明治二年五月一五日に刊行された『言海』の六二八刷（昭和六年三月十五日刊）を底本としている。底本の欠損や汚れは他ほ版本で補った。また、底本中の差別的表現や語句は刊行された時代背景と歴史的・資料的価値を考慮してそのままとした。

(10) 周祖謨『廣韻校本・附校勘記』第二版 一九八八年 中華書局。

(11) 『漢語大詞典』第一版 一九九〇年 漢語大詞出版社。

(12) 王力『古代漢語』修訂本第二冊 一九八一年 中華書局。

(13) 佐藤稔『異体字』『漢字講座3』漢字と日本語』昭和六二年一月一〇日 明治書院。

(14) 陳力衛『和製漢語の形成とその展開』二〇〇一年二月二八日 汲古書院。

(15) 金田一春彦・林大・柴田武『日本語百科大辞典』〔縮刷版〕一九九五年五月二五日 大修館書店。

(16) 山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』一九七〇年二月 宝文館。

(17) 佐藤喜代治『和製漢語の歴史』『講座日本語学4』語彙史、昭和五七年一月十日 明治書院。

### ^調査文献

- 幸田露伴『露団々』明治三十三年二月一〇日 金港堂本店
- 『さゝ船』明治二十八年二月一〇日 福音社

- ”『勇魚捕』明治二四年一月一八日 青木嵩山堂  
”『小品十種』明治四一年六月十一日 成功雜誌社  
”『通俗三國史』明治四四年二月二六日 東亞堂書房  
”『真西遊記』明治三五年一月一日 青木嵩山堂  
泉鏡花『活人形』明治二六年五月二日 春陽堂  
”『冠弥左衛門』明治二九年一〇月七日 田中宋菜堂  
”『錦帶記』明治三二年一月二九日 春陽堂  
”『通夜物語』明治三四年四月一六日 春陽堂  
”『風流線』明治三七年一月二日 博文館  
樋口一葉『一葉全集』明治三〇年一月四日 近世畫報社  
国木田獨歩『獨歩集』明治三八年七月二三日 彩雲閣  
”『涛声』明治四〇年五月一日 秀英舎  
山田美妙『美妙集』明治四三年二月一八日 春陽堂  
森鷗外『煙塵』明治四四年二月一三日 文雨堂  
末広重恭『雪中梅』明治一九年一〇月六日 春陽堂  
森鷗外『月草』明治一九年二月一九日 春陽堂  
”『人種哲学梗概』明治三六年一〇月一八日 春陽堂  
”『審美極致論』明治三五年二月二日 春陽堂

主指導教員（舩城俊太郎教授）、副指導教員（大石強教授・井村哲郎教授）